

黒部川上の廊下く沢旅の五日間

山行実施日(八月五日〜十日)

山行要略

八月五日

浦和駅で鈴K車に乗せてもらい、一路出発地点の扇沢を目指す。日付が変わった二時過ぎに到着。景気づけに一杯飲んでからシュラフカバーに潜り込む。

八月六日 晴れ

ダムまでのトロリーバス、この期間は始発が七時三〇分だった。そうすると平の渡船の十時は無理で十二時になつてしまう。ゆっくり行けばいいかと思つたが、黒部湖の水平道はちつとも水平でなくアップダウンが結構ある。荷物が重いせいもあり(私が二十八キロ、鈴Kさんが二十三キ



ロ)結局船が出る二十分位前にやつと平の小屋に着くことができた。小屋番兼船頭の方に聞くと、水量が多くて引き返してきたパーティーもいるという。ただ最近は目立って湖の水面が下がっているとの

ことに大いに期待する。乗船は我々の他には奥黒部ヒュッテに泊まるという一名のみで計三名だった。

船を下り、奥黒部ヒュッテまでの道も山腹が崩壊しているところを梯子段で上下するものだから結構なアルバイトだ。ようやく奥黒部ヒュッテ着。こここの小屋番の方にお話を再度聞くと、二パーティーの内一パーティーが上の黒ビンを越えられず戻ってきたとのこと。この時期はまだまだ水量が多くて遡行困難な様だ。入渓の支度を整えてから東沢沿いに本流に達する。ちよつと河原を歩いたら熊ノ沢が左岸から入り込んできている反対側の河原が快適そうだったののでそこを今晚の宿泊地とする。我々は熊ノ沢で水を汲んでから徒歩したのだが、右岸にも支流が流れ込んでい

た。

しばらく雨が降っていないかっただようであつという間に流木に火が着き、シチュエーションは万全だ。二人とも竿を出したのだが残念ながら当たりはなし。本日は私が食当。海藻サラダ、ヒジキ煮、豚肉味噌炒め、ベの冷たい蕎麦を食してテント内に潜り込む。

八月七日 晴れ

稜線上での宿泊も考えてテントとしたため、全く寒さを感じることなくよく眠れた。準備に手間取り八時頃発。徒渉を繰り返していくと下の黒ビンガが圧倒的な岩塊となつて迫ってくる。



ここでまず、右岸から左岸に流れのきつい流心を越えて泳ぎ渡らないといけない場所が出てきた。鈴Kさんは辛くも成功したが、私は流されてしまいお助け紐を出してもらって何とか渡りきる。



この先、右岸に渡って少し

高巻き既存支点があったので懸垂下降で川床に戻る。その際に鈴Kさんはせっかく持ってきていた菅笠を流れに落としてしまった。

とにかくにも下の黒ビンが突破である。これで遡行の目が出てきた。

十一時過ぎに口元のタル沢出合着。日向だったので、冷え切った体を温め行動食を取って少し長い休憩。

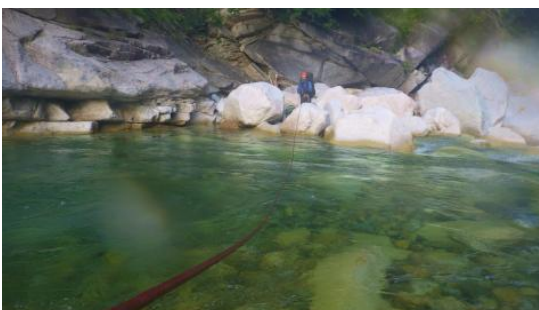


その後再び入水する。

ところがこれが難関だった。右岸沿いに水線突破を図ったが、水流が強い割に岩壁がつるつるで手がかりが全くないので足が進まない。諦めて少し戻り、左岸の高巻きを試みる。既存のロープが伸びているが途中の草付き垂直壁で切れている。実はここが高巻きルートだったのだが、まさかここでは無いだろうと思い、もう少し戻ったところから鈴Kさんが空身でロープを引っ張り登っていった。三十mザイルはすぐに一杯になり、もう一本のザイルを継ぎ足す。ルート工作に時間が係りなくなか戻ってこなかったがようやく降りてきた。やはり最初の草付き垂直壁がルートとのこと。トップロープ状態で鈴Kさんがまず登り、その後に私が確保して貰って上がる。

発進が荷物持って上がると実に変だ。ようやく十m程上がり、そこからヤブをトラバースして下の難所を廻りきったところで残置シュリングを発見。新しいから先日突破したパーティが残したものかもしれない。空中懸垂でようやく川床に戻った。

この先も左岸から右岸に流心を飛び越えて渡る難所があった。



私が空身でザイルを引きながら流心を飛び越え、その後私に私のザックを引っ張ってから鈴Kさんを引っ張り上げる。時刻は既に十七時になろうとしていた。少し先の右岸高台が砂地であり、かつ流木も大量にあったので迷わずそこを宿泊場所にする。後日地形図で確認したところ、北緯36.29.33、東経137.35.47の地点だった。食当の鈴Kさんが作った海藻サラダ、水餃子、ポトフを食べて爆睡する。

八月八日 晴れ

本日は少し早く、七時頃に出発。五十分くらい歩くと「黒五」と言われていた堰き止め湖だったあとの河原に達する。黒部川にもこんな所があったのかという河原歩きをしたのちにまたもやゴルジュ帯突入。上の黒ビンガである。



綺麗な滝が二つほど続けて左岸から流れ込む。黒部川で最も良いロケーションかもしれない。



徒渉を繰り返して金作谷出合着。ここから先も何力所か流心を渡っての泳ぎがあった。



綺麗な滝を掛ける赤牛沢出合を過ぎてしばらくすると岩苔小谷出合(立石)。時刻はまだ十五時前で早い、積乱雲が出ていることもありここで行動中止とする。ここも良いテン場だったが、流木はちよつと少なかった。一休みしてからルアー竿でトライしてみたら何とか九尺程度のサイズを二尾ゲット。ありがたい、自然の恵みだ。



鈴Kさん製作のゴーヤチャンプルが美味しい。談笑しつつ焚き火と星を見ながらテントに入って就寝。

八月九日 晴れ

当初の計画では三俣山荘まで行ってから廃道と化している伊藤新道を下る予定だったが、どうもこの分では無理だ。

結局、今日は雲の平まで行き、明日は天気も良さそうなので裏銀座縦走路を歩くこととする。結果論ではあるが、赤木沢を遡行して薬師沢の稜線直下でビバークしてから折立に下った方が沢屋らしかったかもしれない。

五時過ぎに起床し、焼き枯らした岩魚を食す。美味である。鈴Kさん担当のご飯と味噌汁、大豆肉と茄子の炒め物も美味しい。



七時過ぎから動き出し、朝イチから徒渉を何回か繰り返して進むと立石奇岩だ。要するに岩盤の裏側が沢水で浸食され、前方部分が筒状に削り残されたものらしい。



さしもの上ノ廊下も大分流れが穏やかになってきた、と思いきやE、D、C、B、A沢のゴルジュの出口の所、左岸から5m位ではあるが懸垂下降を強いられる。



ここを過ぎたら本当に流れが緩くなり、徒渉も楽になった。大東新道のペンキマークが所々出てくる中、ちょうど十二時位に薬師沢小屋に到着、行動食(朝炊いたご飯をおに

ぎりに握ったもの)を食す。

ここで沢とはお別れだ。雲の平への急坂をよじ登ること三時間弱で雲の平山荘着、夕立を小屋で雨宿りしてからキャンプ場に向い、テント村の中に何とかテントを張り小屋で買ったビールで乾杯した。

八月十日 晴れ

四時に出発、祖父岳、水晶小屋、野口五郎岳、三ツ岳、烏帽子小屋と裏銀座縦走路を歩行する。景色は絶景だが、感動は今一つだ。そう、耳元をかすめる渺々たる風切音が私にはややもすると黒部川の轟々たる水音に聞こえてしまう。やはり上ノ廊下は圧巻であった。

急坂のブナ立尾根を下り、高瀬ダムに着いたのは十六時と行動時間十二時間、ここで我々の沢旅は終了した。

クワの大溪流天気は◎

鈴K

山行実施日（八月五日～十日）

8/6(木)6:50BP-7:30 黒部ダム～12:00 平ノ渡～15:00 奥黒部ヒュッテ～
16:30 熊ノ沢出合い付近 BP
8/7(金)8:00BP～9:40s 下ノ黒ピンガ～11:16 口元ノタル沢出合～左岸懸垂・空
身飛び込み等～17:20 廊下沢出合い付近 BP
8/8(土)7:13BP～9:05 上ノ黒ピンガ～10:17 金作谷出合い～15:00 岩苔小谷BP
8/9(日)7:10BP～8:04 立石奇岩～12:03-12:30 薬師沢小屋～15:30 雲の平BP
8/10(月)3:52BP～6:38 水晶小屋～9:50 野口五郎岳～13:03 烏帽子小屋～フナ
立尾根～16:08 高瀬ダムー扇沢ーコミュニティセンターの湯ー帰崎

パルコ9Fで8月沢ネットの打ち合わせを行い、そのまま大町に向かった。大型台風は大陸に去っていくようで、天気心配もなく、思いっきり太陽が照り付けてくれるようだ。車の運転を途中でH高さんと交代しながら扇沢につく。軒下で仮眠をして早朝1番のバスを待った。

8月6日（木）昨日、胃検診でバリウムを飲んでいたのでお腹の調子が怪しかったのだが、どうやら落ち着いてくれたようだ。チケットを買う行列に並びながらザツクの重さを量ってみると、ガチャ類を除いて23キロだった。

H高さんはなんと28キロ。これで歩けるのかと心配になるが、一度膝にザツクを載せて、素早く体を回して腕を通して、もう一方の腕を通して背中に乗せた。自分の頭よりもザツクがはるかに高くなっている。先頭のバスに乗り込むと静かにバスはトンネルの中に入っていく。トンネルの中は涼しくて気持ちがいい。目の前には黒四ダムが広がり、一緒に乗っていたお客も三々五々に散っていく。周りに沢屋やはいないかとなげに目を配るが、我々だけのようだ。対岸を平ノ渡に向かつて淡々と歩く。重いザツクが肩や腰に食い込むが、これから始まる遡行に期待が膨らませて汗を流す。どうにか12時の渡しに乗ることができた。渡しの人に聞くと、上ノ廊下に入るのは3パーティー目と

のこと。8月2日に入ったメンバーは敗退だったとか。このところ雨はなく、湖面の水位も下がってきているから、可能性はあるようだ。遊覧ボートは好きなように岸につけて遊んでいるのを見ると羨ましく思いながら、奥黒部ヒュッテにたどり着く。小屋で登山届を提出し、状況を伺うと、遡行できれば我々が2パーティー目となるようだ。まだ、雪渓が残っていて水量があるので、最初の激流を突破できなかったら戻ってくるように言われた。とりあえず、熊ノ沢出合い付近まで入って幕場とすべく河原に降りた。今回はアクアステルスを試そうと履いてみた。さすがに、花崗岩にいいようだ。下山もこのまま行けるだろう。熊ノ沢出合いには大きなイワナの姿も見かけたが、釣り上げること

はできなかった。たき火は点火すればあつという間に炎を上げ、天を焦がした。いよいよ黒部の源流を堪能できる。重いザックで腰骨が擦れたので、フィルムシートを貼った。重いザックに苦しめられていたことをすっかり忘れていた。夜空には、白鳥座とこと座、北斗七星が現れ、天の川が映し出され、北極星も確認できた。

8月7日(金) 広い河原を前にゆったりした気持ちでいると、出発が8時になってしまった。どこまでも河原が続くような気がしながら、平坦に見える瀬を渡るにも水の勢いがありスクラムをし、また、棒で体重を前に倒しながら後ろに持っていけないようにして横断していく。川幅が狭くなり、下ノ黒ビンガのゴル

ジュに入っていく。水量に圧倒されて右岸を巻いて越える。なかなか手ごわい。雪溪の詰まった口元ノタル沢を過ぎると、谷はかなり絞り込まれ、左右の縁を攻めてみたが解決できず、左岸を高巻く。ルートの設定に手間取り、半日近くかかってしまい、最後は30mの懸垂だった。ザックがもう少し軽くしておけば、微妙なヘツリで行けたかもしれないね。



さて、もう日が暮れかけていたので、ルート工作の猶予はなく、その後は、ぎりぎりの飛び込み渡渉をしようやくゴルジュを抜け、砂地の幕場にたどり着けた。このときすでに5時を過ぎていており、急いでたき火をして体を温めた。

8月8日(土) 水量の多さと両脇に沢には雪溪が詰まり水温が低い。手ごたえを感じながら、この先どのくらいまで進めるのか心配になりながら、太陽に背中を押されて前に進んだ。7時過ぎには出発。河原から青空の下に稜線が覗き始め、渡渉の時の水圧が減ってきた。陽の光に照らされて優しく上ノ黒ビンガの壁が迎えてくれた。左岸から滝が天から落ちて輝いている。金作谷は雪溪の廊下なつてと上

部まで繋がっていた。



泳ぎ、渡渉、ヘツリと楽しみながら開放的な黒部川を遡っていく。どこまでも澄んだコバルトグリーンが心を癒してくれる。岩苔小谷に着いたのは3時ごろだったが、雷雲が覗いており、この先のゴルジュを越えるまで我慢してくれのか心配だったので、ちょっと早かったが幕場とした。H高さんは竿を出しにいき、私はさすがに、3日目の疲れがたまっていたので、のんびり薪を集めながら休んでいた。また、食担を1日交代にしていたが、私の疲れを察してく

れて、2日目に続き3日目を私の食材としてくれたので、ゴーヤチャンプルの準備をした。しばらくすると、27、8cm食べごろのイワナ2尾の袋に入れてH高さんが帰ってきた。ここで、イワナ食べなくてはどこで食べるんだと言いたいところだ。自分で釣れなくても、うれしいものである。さつそく、流木の端で櫛を作り塩焼きにした。この日も雨はなく、温かく寝ることができた。

8月9日(日) H高さんは私の疲れ具合と、下山コースをにらんでいろいろ案を練ってくれた。結局、雲ノ平から薬師小屋を経由して裏銀座を通り、高瀬ダムに降りることにした。私は、北アルプスをほとんど歩いたことはないの

で、どこを通っても新鮮である。雲ノ平や裏銀座、一度は通ってみたいところでもあった。焼き枯らしたイワナを味わい最高の朝食をいただいた。



7時過ぎに出発。谷は狭くなってきたので、太陽の日差しはまだ差し込んでいて、上を見上げると、稜線はまぶしく光っている。澄んだ水とどこまでも青い空に吸い込まれるように、谷を分けていく。10時40分こ

ろ沢に降りる梯子が見え、高原への登山と合流した。そろそろ廻行も終了になるが、薬師沢小屋までゆつくり楽しんで沢を行く。12時、薬師沢小屋のつり橋を渡るときは心に沁みるなにかがあった。



急登の登山道を登り、傾斜がなくなると木道が伸びていた。北アルプス360度を見渡せる大パノラマである。「雲ノ平」の名前通りであり、すばらしい。H高さんがいろいろ説明してくれ、観光旅行の

ようで飽きなかった。小屋に着くと、初めての雨となった。軒でしばらくやり過ごし、今回の山行では初めてのアルコール(ビール)を買った。少しすると雨が上がり幕場に向かった。すでに、よい場所はなかったが、他のテントの間に石を移動させて平らにすると、悪くないスペースが確保できた。人が多いので、蚊がうるさかったが、水が豊富でトイレもあり、快適だったと言える。

8月10日(月) 最後の下山は長い。朝4時に出発し、祖父岳で日の出を見る。三俣蓮華岳がどっしりと構えていて印象的だった。はるか遠くの立山の方から歩いて来たかと思うと、よく歩けたものだと我ながら感心してしまう。野口五郎岳周辺はコマクサが

ガレの中で点々と健気に咲いていた。登山道を小石で並べ、踏み込まないようにして、いずれはコマクサのお花畑になるかもしれない。烏帽子小屋で一休みすると、高瀬ダムまでは急峻な下りが続いていた階段状になっていて、膝がやられそうだった。花を求めて？一人で登ってくる女の人もあり驚かされる。高瀬ダムに着くと、タクシーが迎えにきてくれた。他の人の迎えだったようだが、入れ替わり立ち代わりと登山者が下山して来るので、連絡せずとも乗れる状況のようだ。まあ、この時期だからだろう。扇沢に着き、風呂に向かうと、途中にコミュニティセンターの温泉が400円ということで飛び込む。風呂から出てみると、豪雨が通過しているところだった。今回の天気恵まれ、

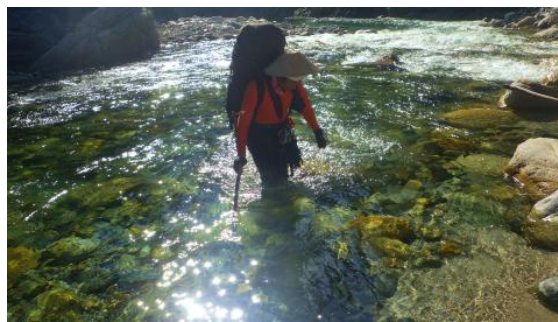


焚き火とビリー缶

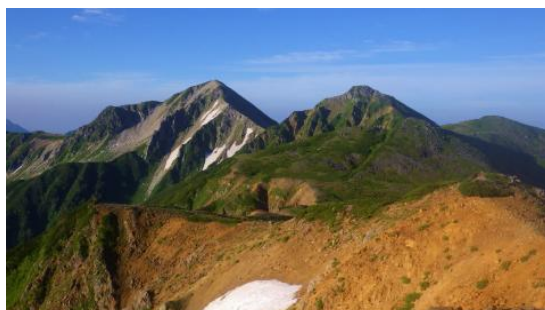
感謝、感謝である。同行していただいたH高さん、大変お世話になりました。羽竜さんは体調により参加でませんでした。が、近いうちにリベンジしましょう。



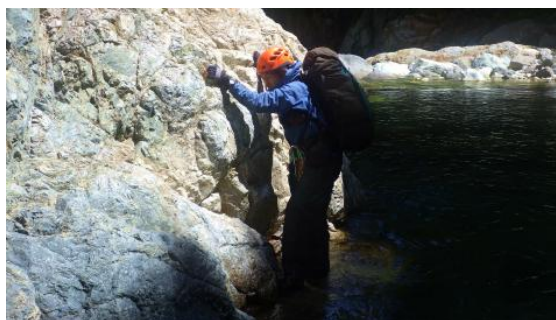
コバルトブルーの水面



菅笠が決まっている鈴木さん



鷲羽岳(左)とワリモ岳



へつり